

先住民と華人によるマングローブの利用：リアウ州沿岸部の事例

The use of mangrove timber and space by indigenous and Chinese communities: A case of coastal area in Riau

大澤 隆将 (金沢大学)

OSAWA Takamasa (Kanazawa University)

リアウ州を流れるシアク川河口部の沿岸一帯は、汽水河川が迷路のように離合する低湿地であり、こうした汽水河川の沿岸にはマングローブ林が広がっている。マングローブ林内部は、干満の影響を受ける泥濘や地面から生える気根など、人が生活や移動をするには著しく過酷な無住空間である。しかしながら同時に、マングローブ林内部には建築用・木炭用の良質な木材が生育するのに加え、後背地側の周縁域には食料であるサゴが自生し、水域側の河川は満潮時には穏やかで小型カヌーが行きかう交通路である。こうした、人を拒絶すると同時に引き付けるようなマングローブ林は、過去から現在に至るまで、シアク川河口部の汽水域一帯に暮らす人びとの交通と資源の利用に大きな影響を及ぼしてきた。

18世紀以前、この地域を支配したジョホール王国は、マングローブ林周辺に暮らす先住民の人びとを完全には掌握できておらず、これは交通・居住が困難なマングローブ林域が国家支配の及びにくい空間であったことを示唆している。いっぽう、19世紀後半になると、この地域にシンガポール向けの建築資材を伐採輸出する目的で、多数の華人の出稼ぎ労働者が進出する(Barnard 1998)。20世紀に入り建築用材の需要が縮小して以降も、特にマングローブ材を用いた木炭の加工・輸出が、当該地域に点在する華人と先住民の共同体にとって長く主要な現金収入源であった。2000年代以降、環境保護運動の高まりの中でマングローブ林は保全の対象となり、州政府による炭の輸出の制限が行われ、マングローブの植林活動が推奨される(Osawa 2022)。しかしながら、2010年代の中盤以降、都市部の資本を受け入れながら、大規模なエビの養殖地としての利用が進んでいる。

本研究では、リアウ州ベンカリス県のルパット島とベンカリス島に暮らす先住民（アキットとスク・アスリ）と華人からなる集落における、マングローブ林周辺の資源と空間の利用を概観しつつ、陸域と海域をつなぐ境界的な無住空間でありながら同時に遠隔地同志を結びつける交通路でもあるマングローブ林の空間的あり方について考察を行う。

参考文献

- Barnard, T. P. (1998) 'The timber trade in pre-modern Siak.' *Indonesia* 65: 86–96.
Osawa, T. (2022) *At the Edge of Mangrove Forest: The Suku Asli and the Quest for Indigeneity, Ethnicity and Development*. Kyoto University Press: Kyoto.